三法六行思考について*

大 西 壽 智**

A Successful Thinking with Three Elements by Six Steps*

by Hisatomo ONISHI**

1. は じ め に

昭和30年に阪大溶接工学科を卒業し、足掛け43年間、機械製造業である帝人製機㈱とその関係会社で、かなり幅広い部門と職務を遍歴した。

その間、直接溶接に携わったのは最初の数年間だけ、後は国内外の工場建設、海外での合併事業、工場運営、会社の経営など、溶接とは疎遠になりがちであった。

今回、同級の中村治方氏から、現場経験で得たものの考え方について、本誌に寄稿するよう、ご推挙頂いたので、面映ゆい気持ちで拙い筆をとることになった。

2. 溶接屋の遺伝子

学生時代、お世辞にも真面目に勉強したとはいえないが、岡田先生はじめ、素晴らしい先生方のご薫陶をうけ、ものをつなぐということの基本的な思想の遺伝子を知らず知らずの内に頂いたのではないかと考えている。

この遺伝子は仕事をする上で、常に基本原理として作用してくれたので、金属やその他の材料をつなぎ合わせる以外に、人と人、技術と技術、会社と会社のみならず、人と技術、技術と会社、その他、あらゆるものをつなぎ合わせる場面で大いに威力を発揮してくれた。

反面、機械製造業に入って違和感を持ったことは、つなぎ合わせるのとは逆に、切削加工など、折角の材料を大量に切り屑にしながら部品をつくることであった。そ

してその部品たるや、自然界に存在するような洗練されたフォルムとは縁遠かったことである。自然の理にかなった自由なフォルムを、しかも必要なだけの材料をつなぎ合わせることで実現したいとの念願を持ち続け、幸いにもその夢を在職中に『光造形法¹⁾—積層造形システム²⁾』という新しい技術と関わりを持つことで実現した。プラスチック射出成型用の型をこの方法で直接製作することを初めて実用化するなど、この技術の用途拡大に貢献できたことに達成感を味わうとともに、退職した現在も、次世代型システムの開発を支援し続けている。

3. 仏教は経営に生かせるか

もともと、一つ違いの従兄が若い頃から寺の住職をしていたので、仏教に全く無縁とはいえないが、どちらかといえば、無宗教のほうであった。

入社早々の頃、過労がたたって倒れ、再起不能とまで脅され、前途に不安を感じたとき、溺れる者はなんとかのたとえで、『色即是空』の『空』を解釈しようとして般若心経の勉強を初めたためか、知らず知らずのうちに、考え方が仏教思想の影響をうけるようになった。

東京に在勤中、三田にある仏教伝導協会の『仏教聖典を経営に生かす会』に入れて頂き、仏教聖典³⁾の講話を聞く機会に恵まれた。ある時のフォーラムで、非情な経営の場に仏教的思想など入る余地がないと、悲観的な意見も多く出たが、両者は遠心力と求心力の関係であり、そのバランスが企業の経営に不可欠であるという結論に達した。しかし上の議論のように、道徳とか戒律とかという点では些か相反する関係がなきにしもあらずだが、原理的な面では相反するどころか、考え方の基本は仏教も科学も、全く同一ではないかと思うのである。

湯川博士が中間子を発見したヒントは般若心経であったという話は有名だが、近代科学を事業の基盤にする経営で、考え方の基本が生かせないはずはないと考えたのである。経営は常に難問題に遭遇し、その解決を迫られる。いろいろ悩むが、人間の頭で考えるのは一つずつ、だから部分に偏りがちになり、あちら立てれば、こちら立たずで、総合的な結論を出しにくい。そこで、お釈迦様の教えをお借りしようと思い付いたのである。

4. 三法六行思考とは

仏教の基本的な思想は、ご存じの『諸法無我』『諸行無常』『涅槃寂静』の三つ。すなわち、三法印であるといわれている。

これを私流に、『すべての物ごと(法)は複数の要素(因)と相互の関係(縁)によって成り立っている。』、『その関係は刻々変化して結果(果)を生ずる。』、『その

*原稿受付 平成11年8月1日

** 元帝人製機㈱

三法六行思考

第1図

結果の好ましいものを蓄積すれば、理想は必ず実現できる。』と解釈し、この考え方を図式的に表しながら、段階を追って問題を解決に導くことを思い付いた。

三角形の中心にテーマを置き、頂点に構成要素を配したパターンはよく見掛ける図形である。また、先程の『三法印』が三項目から成り立っているように、世の中には三つで構成されるものが非常に多いことに気付く。

老子は『道は一を生じ、一は二を生じ、一と二は三を生じ、三は万物を生ず。』といったそうであるが、その解釈は別として、構成する要素(因)を三つにして考えると、至極便利ことが多い。たくさんあることは三つに分類し、二つしかないと思えることも、別にもう一つ持って来るなど、二つではジレンマに陥ることも、三つ目の要素を入れることで、不思議と解決が付くものである。

そして、これら三つの要素と、相互の関係を第一図に示すように、六段階に別けて順次展開していく考え方を、勝手ながら、『三法六行思考』と命名した次第である。

第一(主体)段階で、主体(法)を明確に認識し、第二(構成)段階で、その主体はどのような三つの要素(因)で成り立たせるかの構成を考え、第三(分担)段階で、三つの要素がそれぞれどのような役割分担をするか、すなわち主体と要素の関係(縁)を考え、第四(相関)段階で、要素相互の関係(縁)、すなわち、重要な作用、反作用を見付ける。この関係が相互に欠陥を補完し、または特長を助長するものであることが望ましい。

次世代光造形システムのイメージ
(欠陥相殺、補完による理想形成のパターン)

第2図

第五(変化)段階で、相互の関係から、望ましい結果(果)を生みそうな関係の変化の方向を読み取り、第六(結果)段階で、相互の関係の変化から生まれる望ましい結果を想定する。

このようにして、構成する要素(因)、それら相互の関係(縁)、それから生まれる結果(果)のコメントを図形上に記入して行き、試行錯誤を繰り返しながら、全体として矛盾のない、調和のとれた形におさめようというのである。

要素のそのものを変えることは難しくても、要素相互の関係の見方を変えることは比較的容易である。そして、更なる変化によって生まれる好ましい結果を予測し、調和させることによって、主体をより理想に近い状態に進化させることが可能であると考えるのである。

5. おわりに

まだまだ、完成という訳には行かないが、このような思考方法を新技術の開発、経営上の問題解決、将来のビジョン策定など、ことの大小を問わず、多岐に亘って応用し、それなりの効果を体験することができた。

第二図は、この思考法によってまとめた次世代型光造形システム(特許出願中⁴⁾)のイメージである。図中の相関関係でマイナス記号の付いた欠陥が、プラス記号の付いた作用で、相殺または補完され、実用が可能となったうえ、特長が助長された結果、精度、コスト、性能ともに飛躍的な進歩が期待されるようになった実例である。

このような考え方に興味ある諸賢のご試用を賜れば、これに過ぎる喜びはない。

参考文献

- 1) 萩原: <http://www.urban.ne.jp/home/hagi>
- 2) 中川: 積層造形システム, 工業調査会, 1996, 11.
- 3) 仏教伝導協会: 仏教聖典 (主要ホテル客室に常備)
- 4) 大西: 特開平 8-72153.